

平成 21 年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
第 2 回森林生態系部会
議事概要

◆日 時 平成 22 年 2 月 5 日 (金) 13:30 ~ 16:30

◆場 所 奈良市 春日野荘 故傍の間

◆出席者

<委 員>

| | |
|--------|----------------------------|
| 井上 龍一 | 奈良教育大学附属小学校 教諭 |
| 川瀬 浩 | 日本野鳥の会奈良支部 支部長 |
| 佐久間 太輔 | 大阪市立自然史博物館 学芸員 |
| 高田 研一 | 高田森林緑地研究所 所長 |
| 野間 直彦 | 滋賀県立大学 講師 |
| 日比 伸子 | 樋原市昆虫館 資料学芸係長 |
| 前田 喜四雄 | 奈良教育大学教育学部附属 自然環境教育センター 教授 |
| 村上 興正 | 元京都大学 講師 |
| 横田 岳人 | 龍谷大学 准教授 |

<関係機関>

| | |
|----------------------|---------------|
| 林野庁近畿中国森林管理局計画部計画課 | 柴田 隆文 森林施業調整官 |
| 箕面森林環境保全ふれあいセンター | 高橋 勝志 自然再生指導官 |
| 奈良県くらし創造部景観・環境局自然環境課 | 辻 和明 課長補佐 |
| 上北山村建設産業課 | 松島 克典 主幹 |
| 吉野きたやま森林組合上北山支所 | 富室 良城 代表理事組合長 |

(以上敬称略)

<事務局>

| | |
|----------------|-------------------|
| 近畿地方環境事務所 | 佐々木 仁 統括自然保護企画官 |
| | 杉田 高行 国立公園・保全整備課長 |
| | 上村 邦雄 野生生物課長 |
| | 角 智則 自然保護官 |
| 吉野自然保護官事務所 | 濱名 功太郎 自然保護官 |
| (株) 環境総合テクノス | 樋口 高志 環境部マネジャー |
| | 保延 香代 環境部リーダー |
| (財) 自然環境研究センター | 永津 雅人 第 2 研究部長 |
| | 岸本 年郎 上席研究員 |

◆議 事

- (1) 平成 21 年度「森林生態系保全再生」実施報告について
- (2) 平成 22 年度「森林生態系保全再生」実施計画（案）について

◆議事概要

- (1) 平成 21 年度「森林生態系保全再生」実施報告について

【資料 1】平成 21 年度「森林生態系保全再生」実施報告

① 植生に関する調査について

- ・ 柵外のササの稈高の増加とシカの個体数調整の関係との分析が必要。
- ・ ネズミ、ウサギによる食害の問題が新たな検討課題である。
- ・ ササとシカとの関係について、ニホンジカ保護管理部会から意見は出でていないのか？
- ・ ⇒データはニホンジカ保護管理部会に提出し、検討してもらっている。
- ・ シカの個体数は有意に減少傾向にある。詳しい解析が必要。シカは動き回るので、全体の密度、局所的な密度のどちらを使っても、ササとの関連性を出すのは難しいだろう。GPS データの解析が重要になる。
- ・ ミヤコザサの柵外の稈高のデータは植生タイプ I、II、V の 3 箇所のみである。牛石ヶ原では稈高が 12~13cm というデータもあるので、少し測定ポイントが少ないようだ。測定ポイントをもう少し増やせないか。
- ・ 菌害についての調査結果は重要である。針葉樹の苗木は菌害の影響を受けやすいため、植栽をする場合、菌害が問題となる。菌害調査は継続したい。菌害を起こしにくい樹種もある。細粒土が多い場所では微生物相が豊かになり、菌害の影響が高いので菌害調査結果を植栽時に役立てるべき。

② 野生動物に関する調査

- ・ 防鹿柵内のネコノメソウ属にハバチ類と思われる食痕が見つかった。今年度は調査時期が遅かったので、来年度はきっちりとした調査をしたい。また、定量的調査手法についても研究中である。
- ・ 今まで植物中心だったが、動物についても自然再生の効果を見ていく端緒が見え始めた。

③ 西大台利用調整地区モニタリング調査

- ・ 希少植物の盗採について監視体制を考える必要がある。芦生ではガイドツアーを行ったらアシウテンナンショウが大量盗採にあった。
 - ・ 盗採された希少種の種名を公表して集団の目で監視することも必要ではないか。せめて協議会では種名を公表してはどうか。
 - ・ 全体リストは公開されているのでここで種名を出すとその種が西大台にあることがわかつてしまう。紙面に残すのではなく、口頭で説明する程度にとどめてはどうか。盗採を防ぐ手段がない以上、公開は慎重にすべき。
 - ・ 被疑者不明で訴訟するのであれば公開してもよいと思う。そうでないのであれば科名等の表現にとどめておいてはどうか。
- ⇒協議会では口頭で種名を説明する程度の公開にとどめる。

- ・過剰利用からの回復があっても村の経済効果が悪くなっていることをどう考えるのか。
- ・利用調整後、5万人くらい観光客が減少した。これは大きな問題であった。しかし、利用調整地区の指定認定機関が上北山村商工会になったことが、良い方向にいくのではと期待している。また、具体的な取組に伴う事業にも期待している。
- ・「過剰利用からの」という言葉が良くないのでは。「H19 の駆け込み需要からの」といった言葉に替えた方がよいのでは。
- ・利用調整前までは西大台は過剰利用だったのか？上北山村はどう考えているのかを聞きたい。
⇒年間 5000 人は過剰とは思わない。利用の仕方が悪かったと考えている。
- ・「過剰利用からの回復」といった書き方では、東大台への利用の影響が出るかもしれない書きぶりを慎重に考えた方がよい。
- ・適正利用であれば人数は関係ないのでは？あとは事務局で表現を考える。
- ・自然環境に関する見解なので利用との関係については利用部会と調整すべきではないか。
- ・部会をまたぐ部分については 2 期計画の中での懸案事項である。
- ・東大台の利用をもう少し活性化してはどうか。
- ・西大台の回復状況をガイドツアーなどで見せてはどうか？学校の環境教育で使えないか？
- ・いいものが内にたまっていて外にアピールできていない。守る方にエネルギーを使っているがアピールが足りない。奈良の小学生でも大台ヶ原に行ったことがある子供が少なく、自分のクラスでも 1 ぐらいしかいない。大台ヶ原は学校単位で宿泊できる施設がないことも問題である。
- ・どこをどう見せるべきか、ということを考える必要性がある。
- ・ガイドへのテキスト作りは進めている。調査結果を皆のものにする努力が必要。

【資料 1-2】第 2 期計画の短期目標における具体的な取組内容（案）

- ・苗畑にある苗木を植栽することも自然再生と捉えたこと、ボランティアとの協働を加えたこと、ササ刈りをシカの餌を減らすための手法とし、柵の内外で行うことにより自然回復を試みること、自生稚樹の保護を緊急対策として位置づけたことなどが第 1 期計画から新たに加わった点である。
- ・よい方針だと思うが、実際どこまで実施できるのかがポイント。ササ刈りについては、ササ刈りを何回、何年繰り返すのかがポイントだと思う。実生が出てきてもササを減らすまではササ刈りは継続すべき。
- ・苗木植栽について、今までどのような植え方をしていたのか、具体的な取組ではどのような植え方（単木的、密植など）をするつもりなのか、考え方を知りたい。検討の必要がある。
⇒植え方については、過去の林班データなどを参考にし、樹種の割合、密度を解析しながら検討したい。正木峠柵内の植栽については、過去の毎木調査結果を参考に検討した。コケ探勝路柵内では 3 本寄植をしていた事例もある。
- ・植栽後のササ刈りをいつやめるのか（生長点がササを超えるまで）、など管理手法についても詰める必要があるが検討できていない。
- ・寒冷紗については、衝立型にすればもっと上伸成長が誘導できる。
- ・植栽手法のうち、客土にドライブウェイの土を使うことについては、奈良県との調整をしていけないかとの意見も出ている。

⇒運搬費の問題などいろいろ検討の余地がある。実験的にやっていくのがよい。(村上委員)

- ・植栽については、人工林を作るという意味合いではなく、まず、森林的環境を整えるための試験としての位置づけで実施する。
- ・植栽は、トウヒの人工林を作ることが目的ではない。

(2) 平成 22 年度「森林生態系保全再生」実施計画（案）について

- ・ササの生育状況調査は 1 回 /5 年でよいので、第 3 期への評価に向けて調査を実施して欲しい。特にスズタケについてはまだ回復の過程であり、ミヤコザサについても稈高の変化を見て欲しい。次は平成 25 年に実施して欲しい。
- ・東大台で見つかっているオオダイガハラサンショウウオの個体サイズが一定化している。これは、森林の保水能力と関連しているかもしれない。また、サンショウウオと柵の関係について気になる。ナガレヒキガエルは柵内外を行き来できるが、サンショウウオはできないかもしれない。移動の抑制が繁殖力に影響している可能性も考える必要がある。
- ・大台ヶ原の巨木についても調査をやって欲しい。特に西大台における資源になると思う。
- ・巨木調査は、動物の生息場所としての評価を含めたらどうか。多様性の保全の面でも重要なデータとなる。

⇒利用部会における資源調査の中で検討したい。

[文責：近畿地方環境事務所]